

古書のたのしみ（令和八年四月）

土屋 博

一「女今川寶嶋臺」

（東都書林蔦屋重三郎・岡田屋嘉七・和泉屋市兵衛、天保九年（一八三八年）刊、一四丁）
古書價格千圓也。當時の往來物、初心者用教科書の一つ。「女今川」は一七〇〇年に澤田きちの著したる女性のための教訓書。名稱は、もともと、往來物「今川狀」（今川了俊の手紙）になぞらへたるものの女性版なり。蔦屋重三郎（一七五〇年生れ、一七九七年歿）の名前あるは貴重。



二「姿百人一首小倉錦」

（江戸書肆甘泉堂和泉屋市兵衛、五四丁）
古書價格千圓也。頭書和歌註釋と畫は、浮世繪師・戯作家の溪齊英泉（一七九一年生れ、一八四八年歿）によるものなり。古書蒐集の喜び、ここに極まるの感あり。されど、問題はくずし字の解讀にあり。昔の皆讀みたるものを讀めぬは、内心忸怩たるものあり。



三「菅原實記 全」

（精文堂、明治二十年刊、定價金壹圓、一四八頁）

古書價格三百圓也。

菅公、醍醐天皇の御宇、延喜元年正月廿五日に都を出て、貳月四日に筑前國に到りしこと判明す。詠める和歌は。以下の如し。

「流れきて磯のもしほやつきしとて袖に玉ちるものおもひかな」



四「新井白石言行録」山路彌吉著

（民友社、明治貳十七年刊、定價拾八錢、一八九頁）

古書價格三百圓也。

新井白石（一六五七年生れ、一七貳五年歿）は、文語を學ぶ者にとりては必讀の書たる「折たく柴の記」の著者としても名高し。かつて目黒文語教室にて今は亡き愛甲次郎先生より講義を受けたること、懐かしく想ひ出づ。

愛山山路彌吉（一八六五年生れ、一九一七年歿。東洋英和學校神學部卒。）は歴史家・評論家。國民新聞記者。岩波文庫に「徳川家康」、「豊臣秀吉」あり。愛山曰く、「歴史家として

の新井君美に到つては日本人種が有する史學的天才として宇宙の才人に誇稱せんが爲めに決して彼の名を忘るべからざる也」と。

五「十貳文豪 第三卷 荻生徂來」山路彌吉著

（民友社、明治廿九年三版、定價拾八錢、一六〇頁）

古書價格三百圓也。初版は明治貳十六年。ちなみに、十貳文豪の最初の六人は、カーライル、マコウレー、荻生徂來、フルツヲルス、ゲーテ、エマルソンなり。愛山曰く、「徂來が先づ人に知られしは文章なり、彼が天下の人を鼓舞せしは修辭なり、而して徳川時代の漢文學は實に彼に因つて一變せり」と。

六「今日の書面」樋渡正一著

（文陽堂、明治四十四年刊、定價壹圓八拾錢、八貳八頁）

古書價格四百圓也。天金。何度目かの購入なれど、目に入れば買はざるを得ず。その價值を知るからなり。一月一日の箇所は、朝鮮役にて蔚山守將軍を務めたる加藤清正の書狀なり。「御加勢も成り難く候については、おのおの其の覺悟仕り候間、御心安かるべく候」と。

七「新井白石言行」藤森花影著

（東亜堂書房、大正五年刊、正價金參拾錢、一六六頁）

古書價格五百圓也。序に曰く、「白石は偉人也。大政治家なり。まことや天稟雄渾、不世出の經世家たりとはいはざるを得ず。幕政の改革を背負ひたる大立物也。其の手腕において將た功績において、當代能く彼に匹儔すべき者あるを知らず」と。

八「新譯 徒然草精解」

（精文館書店、大正七年三版、定價金九拾錢、六四貳頁）

古書價格貳百圓也。芳賀矢一（一八六七年生れ、一九貳七年歿、東京帝大教授）、序文に曰く、「徒然草ほど澤山に讀まれ、澤山に註釋書の出たものは少い。徳川時代の假名草子等に其の文を模倣したものなども随分澤山にある。今日でも盛んに讀まれるのは、平易な文體で平安文學に入る階梯になるといふ便宜と、幾分か道德的訓誡が含まれてあつて、健全な讀物であるといふ點にあるのであらう」と。

九「勝海舟と西郷南洲」朝比奈知泉編

（文武書院、昭和貳年改版、正價金七拾錢、一八七頁）

古書價格三百圓也。朝比奈知泉（一八六貳年生れ、一九三九年歿）は、水戸藩士の次男、東京日日新聞主筆、萬朝報顧問等を歴任したるジャーナリストなり。曰く、「維新史の中核は幕府對薩藩の交渉史である。海舟は幕府を代表し南州は薩藩を名代す。換言せば維新の大局は此の貳人によつて開かれたといふを妨げぬ。されど貳人の役目を嚴密に區別せば、南洲が新しき頁の初行に筆を染めたに反し、海舟は奮き頁の最終行を認めたのである。乙は與へ甲は受け取つた。後者の希望に充てると異なり、前者は義務の最後を演じたるに過ぎぬ。その義務や悲し。」と。

十「古典名作 日本國文學」小島德彌編著

（東京圖書協會、昭和十七年再販、定價金四圓貳拾錢、六五五頁）
古書價格三百圓也。目次は、奈良朝時代、古事記、萬葉集、祝詞。平安朝時代、竹取物語、伊勢物語、古今和歌集、大和物語、宇津保物語、源氏物語、狹衣物語、枕草紙、土佐日記、蜻蛉日記、更級日記、榮華物語、大鏡、今昔物語。鎌倉幕府時代、新古今和歌集、山家和歌集、金槐和歌集、方丈記、平家物語、東關紀行、十六夜日記。吉野朝室町幕府時代、徒然草、神皇正統記、増鏡、太平記、御伽草子。江戸幕府時代、女殺油地獄、好色五人女、春花五大力、櫻姫全傳曙草紙、南總里見八犬傳、東海道中膝栗毛、浮世風呂、諺紫田舎源氏、春色梅ごよみ。

それぞれに設問及び模範解答を附す。たとへば、「古事記に現れた國家統一の精神に就いて記せよ」（高文行政科）。解答「天地開闢、天岩戸、天孫降臨の三大建國神話には、既に我が國獨特の皇室を中心とする國家の體制が預言せられ日本民族の歸一するところが明かに示されてゐる」云々。

十一「晩年の新井白石」多賀義憲著

（北光書房、昭和十八年刊、賣價貳圓八拾錢、一九九頁）
古書價格三百圓也。序に曰く、「藩翰譜にしても讀史餘論にしても、白石の最も得意にして榮譽に輝いた前半生の歴史研究は、幕府中心のものであつたと云へる。然るに退隱後閑居の人となるや、一轉して「古史通」、「古史通或問」を著し「史疑」を大成し、當時加賀侯の前田綱紀をして「本朝古今第一の書」とまで絶賛せしめた」と。

十二「源氏物語繪卷」五島美術館編

（財団法人五島美術館、一九八〇年刊）
古書價格五百圓也。一九八〇年十月に五島美術館貳〇周年を記念して開催せられたる「國寶源氏物語展」は、徳川美術館との共催なりしかば、その圖録には歴史的價值あり。

(令和八年四月十八日受附)